
(笑) = カッコワラカッとし

スケープゴート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(笑) 〓 かつこわらかつことじ

【Nコード】

N0062M

【作者名】

スケープゴート

【あらすじ】

屋上での失恋劇。その後の少年二人の会話。

(前書き)

友情だよ！

だいつきらいよ、あんたなんか。

ショートボブの黒髪を翻して彼女は扉の向こうの階段を下りて行った。ぼくが背にした街の方から冷たい風が吹き抜けて行った。

屋上。長年の雨に叩かれたコンクリートは黒ずんでいて、落下防止の網のようなフェンスは人が登ろうとすると簡単に歪んでしまうようにもろかった。

「大嫌いか……」

ぼくは結構好きだったんだけどな、君のこと。

重くのしかかるような雲に青空の見えるような切れ間はない。その雨を含んでいそうな曇り空の下でぼくは一人取り残されていた。

「あんな女子のどこが好きだったんだよ」

「なに？ 見たの？ 趣味わるっ」

校舎の中の方に開いた扉の陰から泉翔也は現れた。

脱色した髪に耳に空けた数個のピアス穴。その穴には紅いガラス玉が埋められている。彼の格好はもちろん校則違反だが、人の個性だと言って直そうとしない。どこまでも自己中心的な小学校からの友達だった。

「ばーか。好きでお友達がフラれてる現場見るなんて、性格歪んでねーよ？ 俺はイイコだから」

「そんな唇片方歪ませてなにがイイコだよ。いいのならこんなところにまず来ないって」

「あちゃ、ばれた」

愉快そうに笑って開いた扉のある反対の壁に翔也は寄り掛かった。

「ばれたって。だてに小学校からのお友達やってないよ、ぼく」

「おともだちっかつこわらかつことじ」

「あほ。記号を会話に使うな」

翔也はのどの奥で笑う。赤い色のピアスが鈍く光った。

ぼくは翔也のいる方とは逆の方の壁に寄り掛かった。屋上を超えた先の方のひらけた街の上を通って風が扉を鳴らして吹き抜けていった。

「さっきのこ、可愛かったねえ。なに？ 彼女？ ひつでえなあ。

俺、知らなかったぜ、お前に彼女いたなんて。それともまだ告白したてだった子なわけ？」

「彼女だった子。名前は……いつか。調度付き合ってから二カ月かな。ちなみに向こうからの告白だったよ」
「うらやましかろう。」

「けっ！ 告白されて振られた奴にうらやましいなんて思わねえよ、ばーか」

性格悪かったんじゃねえの。

そう言つて翔也は笑った。このやろう……。

街の喧騒は遠い。田舎の学校というのはそういうものだ。街に残った城のためだとか言つて六階建てのビルすら安易には立てられない街。流し目に見下ろしたグラウンドを紺色の制服姿が横切つて行く。

「ああ、もう放課後なんだっけ」

「は。お前放課後だから彼女に呼ばれたんだろうが。あたまだいじよーぶかよ」

ポケットに手を突っこんだまま僅かに上体をこっちに傾けた。

「翔也に心配されるなんて、明日は雨かな」

「ばーか。もうそろそろ降り出すよ。マジでイカれたのか、え？」
わざとあいつのほうを見ないようにしててもわかる。片方の唇あげて、歪んだ頬のせいで片目が三日月型に笑ってるだろう。

ぼくはズボンのポケットに手を入れて煙草とライターを探り出した。
「あゝあ。俺さ、先生に問題視されてっけどさ、俺よりもお前の方がやばいと思うね。ピアスは法律にはひっかかんねえけど煙草はダメだろ」

不満そうな声。実際、微かに聞こえる呟きは先生に対する不満とか

ピアスのどこがいけないんだ、とかだ。吸って、吐き出した煙が翔也の方に流れていく。

「おい、こつちやんな。煙草は吸わない奴の方がダメージデカいんだかんな。肺が黒くなるっての！」

翔也はピアスは平気なくせして、内臓とかそういうのは根っからダメだった。だから、彼は煙草や酒を口にしたことはない。

「やんなってね、風がそつちに行くんだって。いやなら移動してよ」「ちっ」

だからなんでこんな奴が優等生とか言われてんだよ、俺はタバコとかやったことねえのによ、タバコで肺が黒くなるとかこえーっての、てゆーか結局カツコかよ、どーせ俺は成績悪いですよ、ピアスか、ピアスがいかんのか、それとも髪か、

「なんなんだー!!」

「うるさい」

むかつくからあいつに向かって煙吹きつけてやった。

「げえ！ やめれ！ ちくしょう、やったな！」

腕を振り回して煙を払う翔也を見て、もう一度グラウンドに目をやった。

紺色の集団の数は減っていて、砂色にぼつりぼつりと色を落とすだけになっていた。テスト一週間前の普通日課の放課後。部活が停止した日に遅くまで学校に残るようなもつたいないことをする奴は少ないのだ。聞こえてきていた話し声や笑い声ももうほとんど聞こえない。

ぼくを振った元彼女のあの子ももう帰つたんじゃないか。

つらつらと、思考を脳内に垂れ流す。

てん、

あ、雨だ。爪先のコンクリートを一粒の雨が濡らしたのを皮切りに、無駄な思考を断つかのような勢いで雨粒が落ちてきた。

見上げれば、かろうじて灰色だった空が黒い影に塗られた厚い雲が落ちてきている。

見下ろせば、点点といた紺色の制服姿は鞆を盾に走るか傘をさして歩いていた。

ぼくらの居る所は狭いながらも屋根がある。もちろん、一步分足を伸ばせば濡れるような広さだけだ。

下で傘がないと騒ぐ声が聞こえた。

「あゝあゝあゝ。振り出しちまったよ。やっべえな、傘持ってきてねえんだよ。お前は？」

「ぼくは持ってきてるよ。盗られてなかったらある」

「そうかよ。……なあ、おまえさ、あの彼女のどこが良かったわけ？」

「は？」

「あの女子、ショートボブとか似合ってたじゃんか。あの顔であの髪型かよって感じの」

「ん、別にいいんじゃないの、それこそ個人の自由で。確かに似合ってたじゃなかったけど」

吐き出した煙草の煙は翔也の方へ向かうことなく、ぼくの鼻先で漂った。黒い雲を遮る雨のカーテンに煙は叩かれて消え始める。

「結局、遊びだったのかなのか」
やけに突つかかるよな、しかもなんか羨うらやまれてるし。

「んー。遊びじゃないよ。それなりに好きだったし。好感持ってたし。実を言うといま結構シヨック。振られたとかさ、知ってた？」

あの子、前はボブじゃなかったんだよね。ぼくのために髪切ったんだって。切っても気づかなかったけど」

「笑い話じゃねーか。あの女子かわいそー」
くつくつと笑う声が雨音に混じって聞こえた。

ぼくは久しぶりに翔也の表情が想像できなかった。長い付き合いの彼の表情ならいつも手に取るようにわかったのに。

「んで、お前。あの女子のどこが好きだった」
真剣な声だった。いつものふざけたような軽いテノールの声じゃない。

上唇に迫っていた煙草の火を雨に濡らして消した。短くなった煙草をこぶしの中に握りこんで考えた。

「どこって特に考えたことはないな。あの顔にショートボブは確かにいただけなかった、としか。顔が好みだったかな、けっこう。あとはあの明るいことか。本人気にしてたけど、白すぎない肌の色とかはよかったな」

「うわ、肌の色とか見んのかよ。なんかマニアック」

「見ないのか、翔也は」

「もちろん見るにきまつてる」

「ほら」

「好きなところで出すほどは気にしねえってことだよ」

「ふーん。あとは……胸がでかかったとこかな。そんなくらい」

もともと恋と言うほどの感情を持って付き合ってたわけではなかった。顔が好み、胸がでかい、性格が明るい、その程度の好意の延長線上の付き合い。

「かわいそつ。本気じゃなかったってね」

「いまだき本気の交際をするような奴はほんの一握りだよ」

拳をズボンのポケットに突っ込んで煙草を離れた。引きだした手のひらに濡れた灰がついている。

「ほお……」

両手を前に差し出して雨に濡らす。黒い灰が水滴に混じって落ちていった。それを眺めて、ひっこめた手を払って水気を落とした。

「なあ、俺、ほんとはお前のことずっと前から好きだったんだぜ」

しってたか？

「……は？」

翔也の言葉が耳から入って脳を一廻りした。その意味を理解して彼の方を振り返ったときには翔也はすでに開いた扉の奥の階段を降り始めていたようで、ぺたぺたと上靴の鳴らす音が聞こえただけだ

った。

「な……なにいつて！」

「かつこわらかつことじ！」

階段の一番下の方から声。

「ひっかかりやがってばーか！ とつとと優等生なんかやめちまえ！」

階段の踊り場の下からめくってきた翔也の声は笑いを含んだからかいの声だった。

だから、記号を会話で使うなよ。

「とつとと帰って勉強しやがれ、最下位取つてもしらねーからな！」
強い雨の音がかぶさった。背後の空の様子に変わりはないようだった。

翔也が片方の唇を吊り上げて右手を挙げたのが見えたような気がした。

「かつこわらかつことじ」

(後書き)

例によって だいつきらいよ、あんたなんか。 から思いついた作品です。 作品っていうか書きなぐっただけな感じですけど。

最初はボーイズになるかなって思ったんですけど、やっぱりなんか友情系がいいかなって思いなおしまして。

なんだか中途半端な作品に仕上がってしまいました。 かつこわらかっこじ。

……ふざけました、すいません。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0062m/>

（笑）= かわらかわらことじ

2010年10月9日02時34分発行